

# 暗号は解読された 般若心経

岩根和郎 著

はじめに

般若心経の、音とリズムには、独特のものがある。

それを聴くと、母が仏壇の前で日課で唱えていた、子供の頃の、明確な記憶がよみがえる。私は、その脇でずっと聴いていたことから、当時の私でも、その音とリズムを半分くらいは、諳んじることが出来ていた。

その私は、物理学を学び、科学の学術研究者と成り、その後会社を興して経営者と成り、同時に人工知能の開発をしていて、七十歳になった今も、宇宙と『人間』への理解を深める事を、ライフワークとしている。この探求の道の、最初に出会ったのが母が唱えていた般若心経であった。

何時だったか、仏壇に置いてあった般若心経の小さな経典を開いて読んで見ると、何か当然のように、その意味が行間まで含めて、すんなり理解出来ることに気づいた。

私はそれを、般若心経の解釈として、大切にしてきた。

その時点では、仏教特有の語句を吟味して理解していたわけではないのだが、それでも意味は十分に伝わってきた。

自分の人生体験とも重なり、この解釈で十分に有難く、実にすんなりと無理なく理解できるものであった。

この私の人生体験については、一部後半で述べるつもりだが、私は与えられた独自の世界で、「宇宙との一体」を体験し、それを体得することが出来た。

私の体得したそれを空とするならば、空とは《宇宙の理念》であり、時間軸を超越した高次元の「場」としての『超実体』である。まさにそれが空という全肯定の実在であり、完全なる存在であり、それでこそ、昔からなじんでいた般若心経の話のつじつまはぴったり合う。そして、私が体験した空に至る手法も、般若心経の示している空に至る説明と完全に合致する。般若心経の全体像も明確に成り、微細に至るまで、全く矛盾の無い解釈が成り立つ。

結論から言うならば、二百六十二文字に一文字も無駄は無かった。そしてそれは「仏教」でありながら、仏教を超越して、過去と現代の宗教を全て包含する程の、見事なまでの人類普遍の真理であった。

ところが、私にとってはこれほどの般若心経でありながら、最近ある時、テレビで般若心経の解説を聴く機会があって、興味深く聴いていたが、私が理解していた内容とはかなり違うものであった。そこでの空の意味は「実体が無い」とするもので、その内容は実に矛盾に満ちていて、しかもそれは、空虚で虚無的に聞こえた。そして般若心経の全体の趣旨に関しては全く聞くことが出来なかった。

その後ずっと、その違いが気になっていて、どうしてもどこかで解決したいと思っていたが、

ある時、急遽決心して手当たり次第に四冊の般若心経の解説書を購入してきて、一気に読んで、積もった「モヤモヤ」の解消を試みた。

しかしながら驚くことに、その書物の全てが、先に聞いた虚無的な内容と大同小異で、空とは「実体が無い」という点で共通しており、私の理解とは大きく異なるものであり、何よりも、どれを取っても極めて難解であり、納得性が乏しく、般若心経の全体像に関して、明確な解釈は存在しなかった。

仏教用語の語句の説明に終始し、語句の微細に入り込んで、語句の解釈に成ってはいても、最も知りたい般若心経の全体像が全くつかめないものばかりであった。「実体が無い」と言いながら、その無いものを繰り返し説明し、さらに分類しようとしたり、実に複雑怪奇で、内容が矛盾しているように思えて、次第に疑問を募らせていき、その気持ちを消し去ることが出来なくなっていた。そして何よりも、どれをとっても、解説者自身が、般若心経を持てあましていて、困り果てている様に見えたのが、印象的であった。

さらに言えば、仏教の語句や歴史の解説には成っているのかもしれないが、般若心経の解釈として一貫性のある内容とはとても思えないものばかりであった。つまり、私の「モヤモヤ」から始まったここ一ヶ月の調査で分かったことは、「未だ世の中には、一貫性のある般若心経の見解というものは存在していない」という事実が明確になったことであり、これが重要な収穫であった。

私の理解している般若心経は、自分にとっては心底納得の出来る内容でありながら、買い込んできた解説書から分かったことは、未だ世の中には、一貫性のある、矛盾の無い、明快な趣旨の般若心経の解釈というものが存在しない、という事実であった。それを知ってしまった今、私としてはこのまま素通りも出来ない気持ちに成り、それならこの機会にと、私の理解している般若心経を整理して、世に出して見ようと思ひ立ち、今回の執筆に至った次第である。

私は得難い体験を沢山積んだことから、私だから出来る般若心経の解釈というものがあって良いと確信している。それは買い込んだ複数の解説書にあるような解釈とはかなり異なるが、気持ちを込めて、この『暗号は解読された・般若心経』を世に出すことにした。

般若心経の解釈を、現代の私が執筆するにあたって、私は現代用語の語彙の豊富さに感謝し、十分にこの恩恵を受けるつもりでいる。そしてさらに、科学技術の発達により、比喩となり得る題材の豊富さは、今の時代に生きて執筆する者にとって、何ともすばらしい環境である。

一度は般若心経に、関心を持ったことのある人が、本書を手にとって読んでいただければ、必ずや「成るほど、そういう事だったのか」と言ってもらえるものと確信している。

私は本書を著すために、さらに様々な仏教関係の資料を集めたが、そこに沢山の珠玉の言葉に満ちている一方で、読めば読む程、全体像が見えてこないことに、歴史の中での混乱を感じ取った。そして『この混乱の中に自ら入って行ってはいけない』という、強い拒否反応を覚えたのである。

宗教は衆生救済が目的でなければならない。そして薬は効くことが重要で、効かない薬はどんなに理論が完璧でも全く意味がない。そして効かない薬は捨て去る以外にない。ただし効く薬を

見つけたら、その効能を理論的に説明することは可能である。薬の効果の理論付けは後付でよい。  
そこでだが、私のこの執筆作業とは体験が先にあって、それを般若心経に投影して理論付けしていることになる。即ち、理論は、後付けである。

私は、私が納得している、宇宙の姿を、そのまま般若心経に投影し、私が読み解いた般若心経に秘められた衆生救済の道を私の心に素直に従って書き進めたい。

この場面は、あえて私の理解と直感に従って、必要不可欠の仏教用語を再定義し、さらに定義論争を避けるため、出来るだけ現代用語を多用し、現代用語による造語も一部遣って、可能な限り単純な論理で、書いてみたいと思っている。

私の体験から、隠された行間を読み取り、直訳的な語句の意味よりも、内容そのものを重視して、般若心経全体の主旨を明確にし、誰もが歩めるような実践的な書にしたい。

般若心経は極めて論理的に書かれており、数式を丁寧に読み解くようなものである。そして二百六十二文字に凝縮されたその内容は奥深く、これはまさに暗号なのである。そして、本文で明らかにするが、実は暗号にしなけりばならなかつた明確な理由があるのである。

般若心経には、驚天動地の内容が暗号として織り込まれているのだ。

そして、暗号であるからこそ、直訳では絶対に意味は通じないように書いてあるのだ。

従って、般若心経の解釈とは、暗号を解読する作業そのものである。

暗号を解読するには鍵が必要である。そのためには行間に隠された「解読キー」を発見し、行間を埋めて、暗号を解くことになる。

暗号を構成する語句の一つ一つには重要なメッセージが込められている。

一つ一つの語句は、直訳の意味ではなく、重要な意味を象徴している。

それを全体との関係の中で見極めなければならない。

そして、暗号を解いてみれば、般若心経のあれほどの難解さは一気に解消し、実に明快な、そして深遠な般若心経の世界が展開する。

二千年の眠りから覚めた般若心経の真実に、深い感動と喜びを実感していただきたい。

\* \* \*

各節の最初の漢文の後に【漢文直訳】を示し、その後【サンスクリット語直訳】を示し、その後、私の解釈した【現代用語による解釈】を示した。

暗号を解くためには、初めに正確な直訳が必要である。原文となるサンスクリット語や漢語に関しては、私は専門ではないので、最も客観的で、漢文や原文のサンスクリット語に最も忠実と思える、宮元啓一著の『般若心経とは何か』【文献一】を選択し、その中の[玄奘訳般若心経]の和訳と[サンスクリット語般若心経和訳]としたものを直訳として使用し、引用させていただいた。

宮元氏は著書の中で、『わたくしは仏教を含むインド哲学を専門とする学者ですので、本書で一学者の、分際を越えた、もののいい方をしたつもりはありません。「般若心経」を正確に読めばこうであると示すのが、私の仕事です』と書いている。

この私は、過去に学術研究者としての経験もあり、如何にも学者らしい姿勢に共感したことから、直訳として引用させていただいた。

一方この執筆においての私は学術研究者ではなく、学術的立場とは対面にある、空の体験者としての立場から書いていることになる。

そして、本書は翻訳ではなく解釈である。解釈は一つとは限らないことは十分に承知の上で、これは私の体験による一つの解釈であることを明確にしておきたい。

# 暗号は解読された 般若心経 目次

はじめに 1

## 第一節 暗号解読の準備

- 仏説摩訶般若波羅蜜多心経 15  
般若心経中に於ける語句の再定義と再使用 18  
暗号解読の補助線 27

## 第二節 観自在菩薩による衆生救済宣言

- 観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄 35  
般若心経劇場の舞台設定 37  
五蘊皆空という衝撃的宣言 39  
『多元領域』と『二元領域』 42  
観音様による苦厄からの救済 46

## 第三節 色即是空と人間観

- 舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是 53  
『色と受想行識』の構造 58  
完全なる空の立場からの説明 66  
空の時間軸上での解釈 71  
場合分けによる説明 76  
宇宙の生命活動として解釈する 78  
空を現実に降ろして説く 80  
空の体験から語る空 81

## 第四節 生命活動の場

- 舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減 85  
諸法空相の必要条件 89  
『多元秩序』の導入 92  
『事象』と空性 111  
三種類の空の区別 117  
宇宙規模の生命活動 123  
「定説」の空との比較 124  
積み残された問題 132  
問題提起 137

## 第五節 「空への帰還」

- 是故空中 無色無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界乃至無意識界 145  
慎重に暗号を解く 147  
再定義により革命的变化を遂げる 161  
多目的の文字列は『フラクタル結合』である 163

## 第六節 仏教の再出発

- 無無明亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得 169  
仏教の生き残り戦略 171  
初期仏教でなら、空虚な空で正しい 175  
現代用語による解釈の歴史的意義 181  
空への制約を解放する 184  
一旦とらわれて、後にとらわれを離す 185

## 第七節 般若波羅蜜多による悟りの完成

- 以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想  
究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提 189  
地上の悟りと天上の悟り 191  
地上の修行者の悟り 192  
三世諸仏の悟り 205  
私の体験した「二つの実践」 209

## 第八節 未来への長期戦略

- 故知般若波羅蜜多 是大神咒 是大明咒 は無上咒 は無等等咒 能除一切苦 真實不虛  
217  
般若心経に隠された真の意図 220  
暗号を解いて感じる事 222

## 第九節 衆生救済の行動指針

- 故説般若波羅蜜多咒 即説咒曰 羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶 般若心経 229  
衆生救済のための行動指針 231  
ここから先は歴史の中での展開発展 235

## 第一節

### 暗号解読の準備

#### 仏説摩訶般若波羅蜜多心經

【漢文直訳】 なし。

【サンスクリット語直訳】

全知者に敬礼したてまつる。

【現代用語による解釈】

仏が説かれた、「空からの展開」と、そこに至る「空への帰還」の教え。

□般若心經は仏陀が直接説いたものではなく、仏陀入滅（紀元前三八三年）後に、さらに数百年ほど過ぎた時点で編纂されている。

我々の知る漢語の般若心經は、紀元六四九年に唐の玄奘三蔵（→六〇〇～六六四）によって、原典となるサンスクリット語から訳されたものである。

般若心經の写本には、大本と小本があつて、日本に伝えられた玄奘三蔵版は小本である。一方大本には、瞑想の場所と、仏陀と観音様と舍利子と、同行した一団と、その状況を記述する第三者による舞台設定が詳しく書いてあるが、それ以外の内容に関しては殆ど同じとして良いと思う。

大乘仏教は従来の初期仏教を否定する形で成立しているのだが、その過渡期においては、かなりの混乱がみられ、初期仏教の何をどう否定して、どのような大乘仏教が成立したのか、その経緯が明確ではない。

そのような時代背景にあつて、般若心經はまさに大乘仏教における空の統一見解を目指したものであると思われる。

般若心經は独立した一つの教典であり、他の教典を参考に読むものでもない。これ自身に意味があるのだ。般若心經はそれ自身で完結した教典であり、新たな独自の教典であることを大切にしたい。

初期仏教の範囲は、小乗仏教の範囲とほぼ一致するのであるが、小乗仏教の呼称は、大乘仏教が興ってから、大乘仏教側から付けられた、見下した呼称であるので、ここではそれは採用せず、釈迦入滅後から、般若心經編纂までの期間の仏教を、全て初期仏教と呼称することにする。

般若心經の主張には、仏陀が直接説いた仏教こそが正しく、しかし記録には残っていない、という前提に立つ。そしてさらに、仏陀入滅後にバラバラに説かれた仏教は、真実ではないと言う前提と、大乘仏教といえど、一枚岩ではないという前提が有り、般若心經こそ、仏陀の教えそのものであるという主張がある。そのことから、ここでは仏陀入滅後から、般若心經以前の仏教を全て、初期仏教として、否定すべき対象として扱っている。

このタイトルは、仏教としての継続性を特に強く主張していると読める。ここには、時代的には合致しないのだが、それでも時代を越えて、『これこそが、仏陀が説いた真の教えなのだ』という強い主張が込められている。そして私も当然の如く、そう思う。そう信じてこの書を世に送り出す。

## 般若心経中に於ける語句の再定義と再使用

読者も一緒に暗号を解く気持ちになって、般若心経を読み進んでいただきたい。

般若心経には編纂のルールがある。暗号には必ず隠されたルールがある。それを知ることが最初の謎解きの作業である。

まず、般若心経の書かれた状況は、初期仏教から大乘仏教が生まれ出て、大きく思想の根本が変更、進展した時代である。

その事から、先ず人間と宇宙との関係に大きな変更と進展が成された筈だとの予想は十分付くのである。従ってこの時に、当然新しい概念の導入が成されたことは疑う余地は無いのである。まさに、この事実こそ全ての暗号の解説のスタートラインである。

そしてさらに、般若心経は空が重要なテーマであるとされている。

一方、「岩波書店・岩波仏教辞典」【文献二】には重要な指摘がある。それは『歴史的には初期仏教から暫くは、空が仏教の中心思想にまでは達していない。その後、大乘仏教が興って、空について頻りに議論がなされるようになった』と記載してある。

この文献の意味するところは、仏陀入滅後、初期仏教から大乘仏教に至って、空の意味するところは急速に変化しているという、見逃せない事実がある。

その変遷の中で、当時の日常的な、空の単語としての意味と文法上の意味は変わらないが、仏教で扱う場合の空の解釈は、時代によって、大きく変遷していることを、考慮しなければならない、ということになる。そこでは当然の事として、時代により、空の意味には相当な幅があると見るべきである。(重要)

そこでだが、般若心経には幾つかの空が出てくるが、この空は、初期仏教には存在しない新しい概念であるので、初期仏教の語句では絶対に説明不可能であると見極めなければならない。

そこで私は、この真実から、新しい概念の空は、初期仏教で扱われた古い概念の空ではないと断定し、新しく導入した新しい概念を持つ新しい語句でしか、説明することはできないとした。

そして、その空に直接関わっている古い語句に関しても同様に、初期仏教で扱われた古い概念の語句ではないと断定し、空に関わる語句は、新しい概念の、新しい語句でなければならないとした。

暗号解説のためには、その新しい語句を般若心経の中に探し出さなければならない。とする視点に着目したのである。

この見極めと断定が出来れば、解釈する側の、態度は決まり、暗号解説の扉は少しずつ開くのである。

しかしながら、後述するような編纂時の歴史的経緯から、仏教としての継続性を保たなければならない強い理由から、『新たな語句は一切遣わず、従来語句を、新たに再定義し、再利用して遣っている』という重要事実がここに隠されていることを見抜かなければならないのだ。

そして、般若心経をよく読めば、どの語句が再定義した語句であるのかは、明確に記述されていることを発見するのである。



その再定義の証拠となる、隠された記述については第五節で触れることにする。

この事実を知ることこそ、般若心経の暗号を解く最大の鍵である。そしてこれを知れば、暗号解読の扉は一気に開くのである。

そして、これを知らなければ暗号は永遠に解けないのだ。ここまでの二千年の歴史で、この謎が解けなかったことが、それを証明している。

そこで、歴史の中に隠された、語句の再定義に成功すれば、謎は必ず解けるのである。そして私はその再定義に成功し、この謎は解けたと確信している。そして、その結果として、謎の解けた般若心経を以下に示そうとしているのである。

従って、語句の再定義こそ、謎解きのための最大の作業となる。

先ず、この再定義が、どのように成されたかを読み解かなければならない。これは空を説明するための最重要語句であり、この語句の再定義の解読こそ、最も重要な暗号解読の鍵となるのである。

般若心経はこういう仕組みになっている。

## 本書における空

先に示したように、般若心経においては、初めから未定義の空が出てくる。そしてこの空の意味を曖昧にすると、般若心経の意味が全く通じなくなってしまうことになる。

そこで、般若心経における空に到達するために、一旦本書で現代用語を遣って空を定義し、それを般若心経の空と照らし合わせ、両者に矛盾が無いことを示すことで、帰納法的に空を定義しようと思う。

ここで言う帰納法とは、私の空の体験を般若心経の文字列に当てはめて、それで矛盾が無いことを確かめてみようとする事である。

さて、その空を説明しようとした途端に、概念の固定化という重大問題に直ぐに突き当たる。常に言葉を越えたところに真理はあると言う前提で、言葉を駆使して説明はするが、一方読者におかれては、言葉の概念を柔軟に受け入れて、抽象概念を柔らかく受け入れていただきたい。

この空という表現は玄奘三蔵によるものだが、一見して空虚な響きを持つこの語句に、玄奘三蔵の求める究極の世界を託した事は、熟慮の末であり、十分に意味がある事である。

仏教求道者が究極的に求めているものが空である。未だ到達出来ていない対象や概念を未到達の段階で明確に定義することは、確かに矛盾でもある。定義出来るくらいなら、それはもう知っていることになるし、既に求められている事にもなるからだ。

しかしそれであっても、人はそこに方向性を見いだしつつ、執着を取り去ったその先にある存在を空とし、その方向のベクトルに対して空と呼称したとすれば、それは概念の豊富な現代人だからこそ理解出来る事である。

ベクトルの先には、明確に定義出来ない何か偉大な存在がある事を信じて疑わない。そしてそれが確かな「存在」だからこそ、人はそれを命をかけて求めるのだ。それが空である。

「ベクトル」を未定義で使ってしまったが、それは後に示すことにする。

仏教だけではなく、老子の道教においても、名を付けようがない存在、名を付けると実体が失われる存在に対して、「無名」と呼んでいる。同じ発想である。

玄奘三蔵は、語句の概念の固定化に苦慮し、名前を付けることによる普遍性の欠落に配慮して、この空という語句を当てはめたのだ。

求める究極の存在の前に立ちはだかつて覆い隠している群雲を徹底的に排除し、横道への誘惑を解き放ち、心を空っぽにして、最後に体得出来るものとして、それを空とした。

今にして、空とは、実に適切にして深遠な語句であると思う。

そももちろん、ここで空とは、そこへ至るまでの様々な誘惑や、覆い隠している群雲を排除する手段のことではなく、それらの障害の向こうに見えてくる排除不可能な究極の存在のことであり、そこに如何にしても否定出来ない実在として、厳然と存在しているのが空である。

しかし、空が、障害を排除する手段と過程をその名称としている事から、歴史の中で手段と過程が目立ってしまい、却ってその真実が見えにくくなり、それが故に、難解になってしまった事は否めない。

解説書の中には、空が障害を解き放つ手段としてのみ記載されているものがある。

そこで、本書では、空は決して手段ではなく、到達すべき最終目標であることを明確にし、難解になることを避けるために、それら障害の先にある「厳然とした存在」をここに、一度は現代用語で直接的に表現することにした。

即ち、空とは

《求める究極の実在》

《真実》

《宇宙》

《宇宙の根源》

《宇宙の理念》

《宇宙の理念が表現された状態》

《宇宙の秩序》

《宇宙の生命活動》

《宇宙の創造活動》

《普遍の真理》

《絶対普遍の価値体系》

《唯一絶対の存在》

《全存在》

《全存在を入れる入れ物》

そして空とは、これらの概念を「同時」に全て満たす存在である。

※ここで「同時」とは、時間的な概念の同時ではなく、「時間軸を超越した、存在」として「同時」という意味である。

この意味は、本書を読み進むにつれて、より明確になる。

本書では、この「同時」の語句のように、「人間」の住む現象世界での語句を躊躇せずに取り込んで説明をしていくことになる。およそ世の中に、「時間軸を超越した世界」を表現する語句は存在していないので、ここでは、「時間軸に拘束された現実世界」の語句を躊躇無く遣うこと

にする。当然表現上の矛盾は発生するが、それでも趣旨は十分伝わるので、恐れずに遣っていくことになる。

読者の皆さんには、この表現に慣れていただく以外にはない。

「時間軸を超越した世界」の概念は、第四節で明確になる。

さて、もちろんここで言う、宇宙とは天文学的宇宙ではなく、それも含んでの存在の全て、《全存在》という意味である。

しかしながら、これらの概念の一つだけを選択したのでは、空の一面しか伝えきれないことは明らかである。

そこで、本書の解釈としては、これらの概念を適宜、遣い分けることで、何とか空に正面から向かい合いたいと考えている。

ここでは、概念の固定化を恐れず、概念の固定化による弊害を承知の上で、あえて空を最初から正面に捉えて、現代用語を駆使して般若心経を解説してみることにする。語彙の豊富な現代だからこそ、敢えて挑戦する価値があるのだと思う。

しかし、それであっても、空をわかったと言ってはならない。それほどのものである。

私はお坊さんでも、仏教学者でもないから、却って空について、ここまで大胆に言えるのであって、仏教を学ぶ立場の人ならば、こんな大胆なことは出来ないだろう。歴史的に積み上げた空の説明と解釈を無視するわけにはいかないからだ。

このような私の自由で有利な立場を利用して書いていると理解していただければ幸いである。

空という宇宙の根源的な内容を表現する時に、我々の思考は過去から未来に向かって流れる時間軸に縛られた解釈しか出来ないと、重大な欠陥を持っていることを忘れてはいけない。

現代科学であっても、天文学的宇宙において、「人間」が拘束されている究極の空間は曖昧な存在であり、時間は座標系に依存したものであり、それを想定して宇宙を研究しなければならない。

般若心経の中には、そう言う時間と空間を超越した表現がしばしば見受けられる。

空を様々な概念で正面から捉えたことにより、思考では到底到達出来ない対象でありながら、何とか思考の限界を超えようとしている表現者の立場に理解を示すことで、読者の理解も深まると言うものである。

## 暗号解説の補助線

般若心経を解説するために必要な補助線となる語句を用意した。

これらは、極めて重要なキーワードとなる。

これらは暗号を解くための補助線となり、解釈がすむにつれて、見事に般若心経の謎を解き、明確な解答を導き出してくれることになる。

以降、しばしば登場するので、ここでその概略を理解しておいて欲しい。

この補助線は般若心経本文の行間を埋めるには極めて有効な暗号解説のキーワードである。補助線とは一般的に言って、解が得られた後は、消去しても良いものである。そしてこの場合も、理解の後に消去することで、理解は完成する。

### 「空への帰還」と、「空からの展開」

この空を求める修行の過程で、現実世界の中に居る「人間」から、空の世界に向かって、一步一步、「空への帰還」を歩むことになる。

五節以降では、「無の修行」を手段とした、「空への帰還」に関して詳しく説くことになる。一切を無とする修行を必要とする。これが「空への帰還」のための「無の修行」である。

そして、修行が半ば成就して、ある程度空に近づき、さらに小さな空に至り、その空を深める道を究めることで、さらに悟りを深めていく。これが空の中での「無の修行」である。

しかし、修行はそこで終了するのではなく、今度は修行の方向を変えて、その空の立場から現実の世界に降りてくることで、現実の中に空を展開することで、悟りを完成させる修行がある。これを「空からの展開」と呼称することにする。

「空からの展開」とは、空の立場から現実世界の中に居る「人間」にまで降りてきて、現実世界に空を展開することであり、悟りを完成させることであり、それは他者に働きかけることであり、同時に人を救うことであり、社会や国家、人類の恒久平和を求めることであり、人として宇宙の創造活動に参加することを意味している。

この「無の修行」を手段とした「空への帰還」と、「空からの展開」の二つの実践が理解出来れば、難解と思われた般若心経の中の語句も、どちらかの道のどちらかの実践に見事に位置付けられてくるのがわかる筈だ。

この「二つの実践」の提示は、般若心経の理解を一気に深めてくれる程、重要なことなのだ。

「無の修行」を手段とした「空への帰還」は以下のように進化する。

(1) 先ず、「空への帰還」を一步一步登るために導入された「無の修行」である。

(2) 次に、空に達した後、空の中で空を深める「無の修行」であり、これは人生本番としての「空からの展開」との同時進行となる。

修行の順番としては、このようになるのだが、般若心経は先ず「空からの展開」という結論が先に示されることになる。

### 宇宙の『多層次元理論』

本書では、空とは《宇宙》であり、《宇宙の理念》であるが、従来から言われているような「空とは実体が無い」のではなく、その構造は、『多層次元構造』からなり、『超実体』であるとする立場をとる。

ここで「実体」とは、「本質」という意味である。従って「実体が無い」とは「本質が無い」という意味である。そして、『超実体』とは「超高密度の実体」即ち、『超高密度の本質』という意味になる。

宇宙は次元を異にする世界が『多層次元構造』として存在していて、高次元の世界は、こちらと比較にならないほどの超高密度の実体、即ち『超実体』である。『超実体』という存在は『多層次元空間』を成している。

その情報量において、超高密度の実体が満ちているにも係わらず、こちらの低い次元から高い

次元を見ると、こちらが超低密度のために、超高密度の世界には触れられないし、一部触れたとしても、それは雲みたいに、「実体が無い」ように見えてしまうのだ。実体として中身が濃い方が「実体が無い」と感じてしまうのだ。

これを、現代的な比喻で言うなら、それは「場」のようなものである。

我々の知っている重力場、電場、磁場、と言う「場」は、少なくとも時間を入れた四次元空間の中に、厳然として存在するのだが、それは物体ではないから、形も、色も、無い、重さも、長さも、大きさも、無いのだ。「ここに有る」と、場所を特定することも出来ない。

しかし、「場」は物体では無いから、それを直接見ることは出来ないし、物体を通して、間接的にしか見る事が出来ない。見ても雲みたいなものであり、まるで「実体が無い」様に見える。

それであっても、間違いなく「場」に実体はあるのだ。即ち「場」に本質はあるのだ。

従って『多層次元理論』の『超実体』とは、決して物体や形態ではなく、『高次元の場』ということになる。

ここで、『多層次元〇〇』は語句として長すぎるので、以降は『多元〇〇』と省略形とする。即ち、『多層次元理論』は『多元理論』に、『多層次元宇宙』は『多元宇宙』に、『多層次元構造』は『多元構造』に、『多層次元環境』は『多元環境』に、『多層次元秩序』は『多元秩序』に、それぞれ省略形で表現される。

### 一元論から『多元理論』へ

世の中の学説には、一元論、二元論、多元論等があり、それらをこの書に導入することで、その議論からの影響を受けたくないことから、ここでは本書独自の定義とその展開をする。

本書に於ける《宇宙の理念》とは、これは極めて一元論的である。一元論に関しては、世の哲学でいう一元論と、大きな差異はないように思う。まずはそう理解していただいて問題は生じないだろう。

一方、『多層次元理論』を省略形にした『多元理論』とは、本書独自の定義である。そして本書では《宇宙の理念》と表裏一体である『超実体』が定義された。

『超実体』は、本書に於いて『多元理論』で定義される存在であり、一元論の《宇宙の理念》とは一体不可分の関係で、絶対に切り離せない関係である。

以降に展開する般若心経では、後に三種の空が定義されるが、それに一対一に対応する形で、本書独自の『多元領域』を定義する。

『多元領域』は『世界』であり、《全存在》であり、皆空に対応する。

《宇宙の理念》と表裏一体として定義された『超実体』は、完全空と同義である。常に完全調和の状態にあり、それを『多元領域Ⅰ』と呼称する。『多元領域Ⅰ』は『超実体』のもう一面の顔である。

さらに、《宇宙の理念》を投影した、もう一つの顔が『多元領域Ⅱ』である。『多元宇宙』は『多元環境』を構成していて、多層次元であるが、それは同時に『多元領域Ⅱ』の状態にある。これは後に空相に対応する。

一方、『多元領域Ⅱ』のプラットフォームで展開する現象と事象は『多元領域Ⅲ』である。

さらにこの『多元領域Ⅲ』の中には、個々の人間の錯覚が存在していて、そこに対立的に、対比的に見えてしまう存在を『二元領域』と呼称する。

『多元領域』と『二元領域』は対立する概念ではなく、『多元領域』の中に錯覚として、一時的に存在するのが『二元領域』である。(巻頭図を参照)

本書では、西洋哲学における一元論や二元論、及び多元論との混同を避けるために、『多元領域』と『二元領域』を多用することになる。

### 『空のフラクタル構造』

まず、フラクタルというカタ仮名の語句に驚かないでいただきたい。簡単に言えば、繰り返し、現れる相似形と考えれば良い。中学校で学ぶ、幾何で、スケールが違うが、性質の同じ三角形を「相似形の三角形」と言う。これから発展して、スケールだけではなく、時間や次元を越えて、同じ性質を繰り返すことをフラクタルと名付けたのである。

空を構成する『多元宇宙』にはこのフラクタルの関係が、頻繁に出現することになる。

『多元理論』はこの『空のフラクタル構造』と密に係わってくる。本文を読み進むにつれて、理解は進む筈である。

これだけの説明では、とても理解できないだろう。しかし、本文を読み進むにつれて理解が深まり、イメージが作れる筈である。ここでは、ここで遣われる語句のみ記憶していただくだけで十分であり、先に読み進んでいただきたい。『空のフラクタル構造』については、適宜、本文の中で説明していくことになる。